1.「ひとつだけ」

１年近い活動休止を経っても、JUDY AND MARYの状況はほとんど変わっていなかった。表面上は穏やかな顔を見せてはいたが、前へ進んでいこうとする力は希薄に思えた。このままではアルバムのレコーディングに入ることはできない。いい曲ができたら、そのたびに少しずつ録っていこう。それがまとまったらアルバムになると思うから。TAKUYAの提案で、バンドはようやく前に進み始めた。

YUKIは元気だった。高校時代に友達と興奮してささやき合った「1999年地球滅亡説」。いつのまにかそのX-dayは過ぎ、2000年というミレニアム・イヤーを迎えられたことを素直に喜んでいた。

（99年も無事に過ごせた！　最高！ 2000年はいろいろあるぞ~。変わることが楽しみだ。どんどん新しいものに触れていこう）

新しい年の新しい生活のなかで、ゆっくりと振り返る。ずっと、目の前にあるもののことだけを考えてきたら、すべてがごく当たり前に、それでいてドラマチックに、変化してきてしまった。そんな自分の人生が、なんだかとてもおもしろい。

そのいっぽうで進路が定まらないJUDY AND MARY。佐久間正英プロデュースでThe B-52’sのケイトとダブル・ボーカルの任を負ったNiNaのおかげで歌唱力がついたYUKIは、「Brand New Wave Upper Ground」のレコーディングでTAKUYAにほめられ、仕上がりにも大満足だった。しかしかつてはいい作品ができるたびに全員でガッツポーズを取ることができたバンドは足並みが揃わず、盛り上がりにもマジックにも欠けている。

（やっぱりこんなもんなのかなぁ）

それでも久しぶりのライブは楽しかった。ファンクラブ会員限定のツアー“WELCOME 2000 JAMP meeting”。1月19日のZepp Osakaから27日のZepp Tokyoまで計5本。

約１年ぶりのステージとなるこのライブの目玉は、ファンによる抽選で曲を決めるコーナーだった。予想外の曲を引き当てられてしまい、頭を抱えるメンバー。うろたえたり、開き直ったり、顔を寄せ合ってスコア（楽譜）をのぞき込んだり、という滅多に見られない４人の姿に客席は沸いた。どんなに大きくなっても決して遠くへは行かないこのバンドを、フィンはみな愛していた。

アンコールは１曲のみ。「PEACE」という仮タイトルの曲だった。TAKUYAがキーボードを弾き、YUKIが言葉を落とすように歌う。リハーサルをしながら詰めていった歌詞は、まるで“祈り”のように聴こえた。

この曲がやがてJUDY AND MARYのラスト・シングルになることは、まだ誰も知らない。作った本人たちでさえも、その後の展開は予想していなかった。

2月23日「Brand New Wave Upper Ground」リリース。テレビ出演もこなし、JUDY AND MARY復活が世間に知れわたった。3月23日に出た初のベスト・アルバム『FRESH』もチャートをにぎわした。

まだ出すつもりはなかったベストだったが、「今までJUDY AND MARYを聴いてこなかった人にも聴いてもらいやすいものを出そう」というレコード会社のスタッフの言葉に納得し、GOサインを出した。

（「POWER OF LOVE」を今聴いても、全然古くないなぁ。やっぱり私たち、本当のベスト・アルバムが出せるほど長くやってないんだ）

タイトルの命名はYUKI。過去の曲を“新鮮（=FRESH）”と思えることが嬉しかった。

（大丈夫。まだまだやれるよ）

ベストの次は新曲だ。新しいJUDY AND MARYをみんなが待っている。

プリプロ（レコーディング前のリハーサル）は、曲の出来を判断し、スタジオに入ってからの作業をスムーズにするための重要な作業だ。レコーディングよりプリプロに時間をかけるバンドも多い。しかしJUDY AND MARYは、その作業を個人個人ですることに決めた。